千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	学校でコンドームを配布する。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	学校でしっかりとした避妊授業をさせ、一人一人にもっと理解をさせることで、そのようなことを減らせると思う。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	教育に性教育をもっと盛り入れる。妊娠、中絶の問題をもっとﾒﾃﾞｨｱにとり上げさせる。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	する、しないは、その人自身の責任。もし、妊娠して中絶するのであれば、人一人を殺す事だと考えるべき。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	性教育をさらに進めていくべきである。避妊法についての指導も重要だと思う。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	政府は何もしなくて良いと思う。一人一人、個人が気をつけ、自覚すること。学校にて友達同士では、いろいろな話をするが、先生とかとは、話しにくいし、親にも言いづらい。保健の先生とかに気軽に相談できるような環境をつくるとか女の子達が話していました。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	避妊法についてもっとくわしく教える
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	避妊を徹底するように、学校、家庭で教育するようにする。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	法令を作成する。
千葉県	男性	16	ない	ない	ない	ない	もっと、学校に性教育をさせるべきだと思う。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	命のトウトサ。自分の体は自分でまもる。責任は自分にあるとの気持ちを、小学生の頃より自覚を持つことを学校の時間の中にとり入れてほしいと思う。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	現在では、学校の方に、麻薬等、体に害の有る物を禁止すべく、学校に警察の方々が来られますが、このようなｱﾝｹｰﾄにある問題についても同じような意識で取り組むべきだと思います。何より「性行為」という事の考え方から変えていかねば、問題は深まるばかりです。かくいう私も、これを書きつつ、麻薬と同格には考えられませんし・・・。最終的に「sex＝楽しむもの」という考えを変えていくのは政府ではないかもしれませんが、その考えをただすよう、手を引っぱってくれればと思います。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	強姦による望まない妊娠（性犯罪）について、もっと罰則を強化すべきだと思います。中絶については産む気がないなら安易な気持ちで性交渉をしないよう、行政も注意をもっと促すべきだと思います。性感染症については私はこう思うんですが、あくまで性感染症＝病気なわけだから、自分を守れるのは自分だけなんですよ。ですからｺﾝﾄﾞｰﾑを使用すればほとんどの確率で相手がHIV感染だとしても感染を防げるわけです。ゆえに、あとはｺﾝﾄﾞｰﾑを使うor使わないに関しては自分の責任ですから（相手にも迷惑をかけてしまうこともあるが）、もちろんｺﾝﾄﾞｰﾑを使うにこしたことはないですが、使うor使わないは自由でよいかと思う。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	個人の知識も必要だが、学校での授業で知識を高めた方がいいと思う。（なるべく低学年の内に・・・）
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	政府の人間が何しようがすぐに異性と性行為をしたがる奴等は何も変わらないと思います。だから何も考えずに異性と性交する奴はｴﾗいことになっても自業自得で、そんなにｴｲｽﾞやら妊娠やらしたくない奴ははじめっからｾｯｸｽすんなと言いたいです。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	中、高生に対して学校で、ｺﾝﾄﾞｰﾑを無料配布する。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	中学校での保健の教育課程の改善
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	人それぞれの問題なので、政府が介入できることは少ないと思う。しいて言えば性教育のあり方を見直すとか援助交際を取りしまるとか？あまり役に立たない意見で申し訳ありませんが…
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	本人の問題
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	まず、かくさず小さいうちからいろいろな事を正しく教えてくれた方がいいと思う。内緒にするからかくれてコソコソするんだと思う。
千葉県	男性	17	ない	ない	ない	ない	もっときびしい法立を作るべき！？
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	CMを流す。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	今まで考えたことがないので実感がわかない。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	学校できちんと教える。電話で相談できるようにする。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	学校できちんと性教育をすべきである。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	通っていた中学、高校では一応教育はあったものの中途半端だったので、もう少し教育方法を徹底してみては？

千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	極端な話、「望まない妊娠」が起こるプロセスには二種類がある。「1, 女性が強制的に受精させられるパターン」「2, それ以外」 後者は、言い換えれば女性は性交に同意している場合。性交をする上で、避妊をしても100%間違いなく受精しないわけではないという事実は自分も保健の授業で受けているので、学校にまともに行かないカス人間以外は誰でも知っている。政府は十分に危険性を伝え警告をしている。要するに、危険を承知の上でやっているのだから、政府が後者のプロセスを経て起きた「望まない妊娠」について保障する必要は一切ないのだ。政府はまず遺伝子に関する研究に尽力し「受精させたのが誰か」を特定する事を秘密裏に可能にし、以下の政策を実行すべき。①「レイプ犯は直ちに去勢する」②「レイプ以外の原因により妊娠した女性に中絶手術を施さない」バカな学生のカップルがセックスして妊娠して、女は「レイプされたことにして中絶してもらう」と言う。政府は男を特定する。男に残された二択{A;去勢される→セックス自体できない B;レイプでないと証明→②より中絶できない} 男がどちらを選んだとしても、結果はヒドいものになる。その一部始終をビデオ化して、全国の小、中、高校で年一回流せば、望まない妊娠、中絶など100%根絶できる。[※①はレイプ犯を取り締まるもの、非の打ちどころがない法、②は「胎児でも命を持つ」という考えに基づいた道徳的な方]通らないはずがない。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	現状で十分、問題は個人次第
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	政府かどうかはわかりませんが、望まない妊娠、中絶、性感染症、現実にこうなったらどうなるのかもっと公共のTVなどで、放送したらだめなんでしょうか？若い子達の人気である、ｼﾞｬﾆｰｽﾞの人達と討論会等、親子で見ると思います。(単純ですが)
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	小さい頃からのしっかりとした性教育。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	不必要な又は過度な表現、情報提供を慎むようﾏｽｺﾐ全てに自覚と自主規制を求めるべき。(営利を目的としただけの表現の自由などあり得ない。)
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	まずは教育をしっかりすべき。海外でも同じようなことが問題になっているが、外国の対策から学ぶのも手だ。最近の若者は自己中心的な人が多すぎる気がする。もっと人の痛みのわかる人が多くなってほしい。道徳心をつけるための教育をもっとすべきだと思うが、小学校での道徳の授業はほとんどやくにたたなかったと思う。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	もう少し若者に密着し、その人の避妊に対する知識を理解したうえで避妊の正しい知識とそれに必要な避妊用具を提供することだとは思います。
千葉県	男性	18	ない	ない	ない	ない	ﾘｽｸについて知らせることだと思います。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	「性に関心の無かった子供には性教育をしなくてよい」という方針を改め、物心つく頃から感染症防止のための教育を政府から行ってほしい。そうでないと、クラス内で不適な性行為を行った人間から「誤った教育」が広まってしまうと思われる。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	①性教育を中学・高校で詳しく教える事。 ②援助交際などで大人だけが罰せられるが、本人にもきちんとやってはいけない事と認識させるべきだと思う。 ③未成年者の夜間外出を禁止している県があるが、それはとても良い事だと思います。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	学校などの教育の場で性に関係する勉強を早くに子供達に教えていく事、中絶、性病についてなど、小学校の高学年からくわしく教えるようにしてもいいと思う。また中学、高校生にもしっかりと教えた方がよいと思うので、そのような学習をする時間をつくるよう政府は学校に働きかけてもらいたい。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	強制的に妊娠させられたのであれば、男性に罰などを与えるべきだと思う。また、中絶にかかる料金を高くするべきだと思う。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	政府に何をの問題よりも個人個人のﾓﾗﾙの問題であると思います。私の家では、特に母親と話をしました。性に関する問題は、学校と家庭で話し、勉強をした方がいいと思います。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	中途半端な性教育は興味をさそうだけの様な気がする。人間、命、責任、色々考えられる場が欲しい。
千葉県	男性	19	ない	ない	ない	ない	無料で相談やけんしんをする。ｺﾝﾄﾞｰﾑなどを無料にする。

表 6：アンケート調査項目（留置調査・Web 調査ともに同内容）

【1】あなたご自身について教えて下さい。

(1) 年齢・性別を教えて下さい。

年齢：（　　）才　　性別：1. 男 ・ 2. 女

(2) 現在の所属について教えて下さい。

1. 高校生　2. 専修・専門学校生　3. 短大生　4. 四年制大学生　5. 自営業　6. 家事手伝い　7. その他

(3) 通っていた（ないし、今現在通っている）高校について、該当するものに全て○をつけてください。

1. 男子校　2. 女子校　3. 共学校　4. 男女併学*　5. 通わなかった　6. その他

＊「男女併学」とは男性女性が同じ学校に通っていても、クラスが男女で異なる学校を意味します。

(4) お住まいの市区町村名をご記入ください。

(　　)市・区・町・村

(5) 今どなたと住んでいらっしゃいますか？該当するものに○をつけてください。

1. 単身(一人)　2. 親や兄弟　3. 恋人　4. 配偶者　5. その他

(6) 現在の月当たりの収入の総額を教えて下さい。

(　　)円／月

【2】学校における性教育について教えて下さい。

(1) 避妊法について教わりましたか？

1. 全く教わらなかった　2. ある程度教わった　3. 詳しく教わった(避妊法の正しい使い方も含めて)　4. 覚えていない

(2) 性感染症について教わりましたか？

1. 全く教わらなかった　2. ある程度教わった　3. 詳しく教わった　4. 覚えていない

【3】あなたの経験について教えて下さい。

(1) 性感染症について教えて下さい。

i) 今までに性感染症にかかったかな、と考えて病院に行ったことはありますか？

1. いいえ　2. はい

ii) 何の性感染症にかかったことがありますか？該当するものに全て○をつけてください。

1. かかったことはない　2. クラミジア　3. ヘルペス　4. 尖圭コンジローム　5. 淋病　6. HIV　7. その他

(2) 次に、セックスについて教えて下さい(なお、セックスとは男性器を女性器に挿入することを意味します。)

i) 現在までセックスをしたことはありますか？ある方は、何人かお答えください。

1. ない　「ない」を選んだ方は、問9へ。

2. ある(　　)人　その内、過去 1 年間の人数は何人ですか(　　)人

ii) いままで一回だけセックスをした相手はいますか？ある方は何人かお答えください。

1. いない　「いない」を選んだ方は、問4へ。

2. いる (　　)人

iii) 一回だけセックスをした相手とどんな避妊を行いましたか？　多かったもの 2 つまで選んで下さい。

1. 避妊しない　2. コンドーム　3. 膣外射精　4. 基礎体温法*

5. オギノ式**　6. リング　7. ピル　8. その他(　　)

*: 基礎体温法は体温を基準に危険日かどうかを判断して、コンドームをつけずにセックスすることを意味します。

**: オギノ式とは月経予定日から逆算して安全日を判断して、コンドームをつけずにセックスすることを意味します。

【4】今まで継続的にセックスをしたそれぞれの人について、記入例にならって、下の表に書き込んでいって下さい。直近の相手から順に書き込んでいって下さい。相手が 4 人以上いる場合には、最近の 4 人について教えて下さい。

＜記入例＞

期間　(0)年　(8)ヶ月　(　)日　　頻度　年(　)回　月(　)回　週(3)回

避妊法の割合：合計が 100%になるように記入 (2 人が同時に避妊の場合は＊を参照)

① 避妊なし　(　)%　② コンドーム　(　)%　③ 膣外射精　(　)%　④ 基礎体温法　(　)%

⑤ オギノ式　(　)%　⑥ リング　(　)%　⑦ ピル　(　)%　⑧ その他　(　)%

(*: 2 人が同時に異なる避妊法を使っていた場合には、まず同時に使った避妊法に○をつけてください。その上で、同時に使った部分の数字を 100%を越えて記入してください。例えば、記入例で、男性がコンドームを使っていた30%と同時期に女性がピルを使っていた場合には、コンドームとピルに○をつけ、記入例にピルの30%を追加してください。この場合、数字の合計は130%となります。)

妊娠の有無 ① あり (1)回 ② なし

中絶の有無 ① あり (1)回 ② なし

直近 1 人目

期間　(　)年　(　)ヶ月　(　)日　　頻度　年(　)回　月(　)回　週(　)回

避妊法の割合：合計が 100%になるように記入 (2 人が同時に避妊の場合は＊を参照)

① 避妊なし　(　)%　② コンドーム　(　)%　③ 膣外射精　(　)%　④ 基礎体温法　(　)%
⑤ オギノ式　(　)%　⑥ リング　(　)%　⑦ ピル　(　)%　⑧ その他　(　)%
妊娠の有無 ① あり (　)回 ② なし
中絶の有無 ① あり (　)回 ② なし

2 人目
期間　(　)年　(　)ヶ月　(　)日　頻度　年(　)回　月(　)回　週(　)回
避妊法の割合：合計が 100%になるように記入 (2 人が同時に避妊の場合は＊を参照)
① 避妊なし　(　)%　② コンドーム　(　)%　③ 膣外射精　(　)%　④ 基礎体温法　(　)%
⑤ オギノ式　(　)%　⑥ リング　(　)%　⑦ ピル　(　)%　⑧ その他　(　)%
妊娠の有無 ① あり (　)回 ② なし
中絶の有無 ① あり (　)回 ② なし

3 人目
期間　(　)年　(　)ヶ月　(　)日　頻度　年(　)回　月(　)回　週(　)回
避妊法の割合：合計が 100%になるように記入 (2 人が同時に避妊の場合は＊を参照)
① 避妊なし　(　)%　② コンドーム　(　)%　③ 膣外射精　(　)%　④ 基礎体温法　(　)%
⑤ オギノ式　(　)%　⑥ リング　(　)%　⑦ ピル　(　)%　⑧ その他　(　)%
妊娠の有無 ① あり (　)回 ② なし
中絶の有無 ① あり (　)回 ② なし

4 人目
期間　(　)年　(　)ヶ月　(　)日　頻度　年(　)回　月(　)回　週(　)回
避妊法の割合：合計が 100%になるように記入 (2 人が同時に避妊の場合は＊を参照)
① 避妊なし　(　)%　② コンドーム　(　)%　③ 膣外射精　(　)%　④ 基礎体温法　(　)%
⑤ オギノ式　(　)%　⑥ リング　(　)%　⑦ ピル　(　)%　⑧ その他　(　)%
妊娠の有無 ① あり (　)回 ② なし
中絶の有無 ① あり (　)回 ② なし

【5】【4】で答えた人それぞれについて、二人で週に平均何時間くらい一緒に過ごしていたかを教えてください。
直近1人目(　)時間／週　2人目(　)時間／週　3人目(　)時間／週　4人目(　)時間／週

【6】これまでセックスをした場所を教えてください。合計が 100%になるように、大体の割合を記入してください。
1. 自分の家　(　)%
2. 相手の家　(　)%
3. カラオケボックス　(　)%
4. ラブホテル　(　)%
5. 野外　(　)%
6. その他　(　)%
合計 100%

【7】御自分が、もしくは、自分のパートナーが妊娠した経験のある方に質問させて下さい。
(1) 妊娠したことがあるのは、何回ですか？　(　)回
(2) 妊娠したと考えられるセックスの時、避妊をしていましたか？ 複数回経験がある方は、最近の 1 回について答えてください。
1. いいえ　2. はい
(3) (2)で 2.を選んだ方に質問させて下さい。その避妊法は何でしたか？
1. コンドーム　2. 膣外射精　3. 基礎体温法　4. オギノ式　5. リング　6. ピル　7. その他(　)

【8】御自分が、もしくは、自分のパートナーが中絶経験のある方に質問させて下さい。複数回経験がある方は、最近の1回について答えください。
(1) 中絶経験の回数は、何回ですか？　(　)回
(2) 中絶した理由は何ですか？該当するものに全て○をつけてください。複数回経験がある方は、最近の 1 回について答えてください。
1. 経済的な理由で子供を育てることは出来ないから　2. 相手と結婚するつもりがなかったから

3. 親、彼氏・彼女が中絶する事を希望したから　　4. 相手と合意の上でのセックスではなかったから

5. その他

(3) 中絶をする事になったのは誰の意見によるものでしたか？該当するものに全て○をつけてください。

1. 親　2. 彼氏・彼女　3. 自分自身　4. 友達　5. 学校の先生　6. 医師　7. その他

(4) 中絶をしたことは保護者の方に伝えましたか？

1. はい　2. いいえ

【9】望まない妊娠・中絶・性感染症を減らすために、政府は何をすべきだと思われますか？自由に記入してください。

(　　)

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書
健やか親子 21 を推進するための多機関協働による課題解決型アプローチと
評価に関する研究
青少年の性行動に関する先行研究の文献調査

分担研究者　近藤　正晃　ジェームス

日本医療政策機構副代表理事
東京大学先端科学技術研究センター特任助教授

研究要旨

健やか親子 21 を推進するための多機関協働による課題解決型アプローチと評価に関する研究の一環である、青少年の性行動についての実態調査の準備として、国内外の青少年の性行動についての先行研究を検討した。

国内では、学校の生徒・学生および病院の受診者を対象として多くの調査研究が行われていた。人口当たりの人工妊娠中絶実施率の地域差と、対象地域の 10 代男女の性行動の関係を検討した研究は発見できなかった。

国外では、英米での研究調査を検討した。アメリカでは、行政機関が主催する調査が 2 種類あった。そのうち、CDC による若年者を対象とする調査は 2 年に 1 度行われていた。イギリスは、1990 年と 1999 年の 2 回、全世代を対象とする公的な調査を行った。英米とも、家庭状況や教育レベルと性行動の関係を解析していた。加えて、アメリカでは、人種と性行動の関係の解析も行われていた。

1　序論

1.1　研究の背景

10 代女性の人工妊娠中絶実施率は、母体保護統計報告が実施された 1955 年以降、増加の傾向を示している[*1]。女性全体での人工妊娠中絶実施率が一貫して低下する傾向を示していることと比較すると、10 代女性の状況は目立つ傾向である。2000 年度以降、10 代女性の人口妊娠中絶率は女性全体の人口妊娠中絶実施率を上回る状況が観察されている。2003 年度以降、10 代女性の人口妊娠中絶実施率は低下を示したが、10 代の女性 100 人中 1 人は人工妊娠中絶を毎年経験しており、依然として高い水準にあるといえる。また、10 代の性感染症感染（Sexually Transmitted Diseases:STD）率も増加傾向にあることが報告されている [1]。

若年での中絶は、母体の心身に深刻なダメージを、望まない妊娠は、母体の人生に大きな影響を与えると考えられる。性感染症が蔓延している状況も考慮にいれると、何らかの方法で、若年者の性行動の変容を促す必要があると考えられる。

1.2　本調査の目的

「健やか親子 21 を推進するための多機関協働による課題解決型アプローチと評価に関する研究（以下本研究とする）」の目的は、「健やか親子 21」を推進するために、地域ごとの青少年の性行動の体系的かつ詳細な調査を行い、地域ごとの人工妊娠中絶実施率と比較し、両者の関係を分析することで、10 代の望まない妊娠の原因となる性行動を明らかにし、望まない妊娠の減少を目的とする政策に科学的根拠

[*1] 厚生労働省 HP より

を提供するにことにある。

本調査では調査研究を遂行するために、青少年の性行動についての先行研究のレビューを行った。

2 方法

本研究の目的は、国内外で行われた青少年の性行動についての研究についての文献のレビューであった。そのため、国内・海外ともに、医学系の学術論文のデータベースを使って文献検索を行った。

2.1 国内研究について

検索対象は、2000 年以降に発表され、国内の学術論文雑誌に掲載された論文および厚生労働科学研究事業の報告書であった。学術論文の検索には、Web 版の医学中央雑誌を用いた。検索語には、「若年」「青少年」「性行動」「(人工妊娠) 中絶」「性感染症」等を使用した。検索された論文のうち、東京大学医学図書館所蔵の雑誌に掲載されている論文を精読し、青少年の性行動についての報告があるものを選んだ。ただし、2004 年発行の雑誌に掲載された論文については、東京大学医学図書館の製本作業の都合上入手できなかったため、精読、選択ができなかった。引用件数などから特に重要と思われるが東京大学医学図書館で所蔵していない論文のうち、入手が可能なものは別途手段を講じて入手した。厚生労働科学研究事業報告書は、厚生労働科学研究成果データベース[*2] を利用した。検索後は、医学中央雑誌での検索と同様であった。検索された報告書を精読し、青少年の性行動についての調査研究を行ったものを選択した。

2.2 海外での研究について

海外での性行動に関する研究は、木原らによる平成 16 年度厚生労働科学研究事業「HIV 感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学的研究」、平成 16 年度報告書内で、西村らによって HIV 関係の行動サーベイランスの観点から簡潔にまとめられている [2]。

本研究では、この研究に準拠して、アメリカ合衆国およびイギリスでの事例を検討した。英米以外の先進諸国での研究については、西村らの研究を参照されたい。

海外での研究は、論文検索用のデータベースである PubMed[*3]を用いて検索した。検索語には、"adolescent"、"sexual intercourse"、' sexual bahavior" などを用いた。検索した論文から、調査プロジェクトの中心となる論文を探して、精読した。

3 結果

検索の結果、37 本の論文が見つかった。なお、レビュー論文などは除外した。また、性行動についての調査研究を行っていない性教育に関する論文は、除外した。

結果の一覧は、付録 A に掲載した。

3.1 国内での研究について

日本国内での青少年の性行動についての調査研究を、調査対象の規模により「全国規模」「特定の地方を対象とした研究」「病院など」、「ネットによる調査」に分類した。

3.1.1 全国規模での研究

全国を対象とする性行動についての調査として、下記を紹介する。

■男女の生活と意識に関する調査 [3][4] 16 歳以上 49 歳以下の男女 3000 人を対象として、2002 年に第 1 回の、2004 年に第 2 回の、「男女の生活」についての意識や行動を明らかにする目的で、厚生労働科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業)「望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究」の一環で行った。2004 年の第 2 回調査では、性交経験の有無、初交年齢、最近一年間で性交渉を持った人数、使用した避妊法、それぞれの避妊法の頻度についての調査を行った。

■青少年の性行動全国調査報告 [5] 財団法人日本性教育協会が、1999 年から 2000 年にかけて、全国の男女中学生・高校生・短大生・大学生を対象に、性行動、性に関する知識などを調査した。調査対象人数は 5492 人であった。調査は、立地条件などの

[*2] http://mhlw-grants.niph.go.jp/

[*3] http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/

考慮のうえ、学校を選択し、学級単位で集合調査を行った。性交経験の有無、初交時期、調査時点までの通算交際人数、現在交際の交際相手の人数、避妊方法を調査した。都市部と農村部でのる性交経験などの差は見られなかった。一方で、性経験の早期化の傾向が観察された。

■家族・世代世論調査 [6]　毎日新聞社人口問題調査会が、2004 年に全国の 20 歳から 49 歳までの女性を対象に行った調査である。調査対象に未成年は含まれない。既婚者に対しては、避妊法を、未婚者に対しては避妊の有無を調査した。

■STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査 [7]　厚生労働省「HIV 感染症の疫学研究班」が 1999 年に、全国 18 歳から 59 歳の男女 5000 人を対象に、HIV/STD 関連知識、性行動、性意識についての調査を行った。初交年齢、調査時過去一年間の性交渉頻度、過去一年間の性交でのコンドームの使用頻度などの調査項目を含んでいた。

■全国高校生の生活・意識調査 [8]　社団法人全国高等学校 PTA 連合会と 2004 年度厚生労働省「HIV 感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学的研究班」の共同調査により行った調査である

全国の男女高校生 9587 人からのデータを得た。詳細は 2006 年 3 月段階で未公表であるようであった。

■若者の HIV/STD 関連知識・性行動・性意識に関する研究 [9]　厚生労働省「HIV 感染症の疫学研究班」が、1999 年に全国の国公立大学の大学 1 年生および大学 4 年生を対象、HIV/STD 関連知識、性行動、性意識などの調査を行った。性交経験率、性交渉を持った通算人数、過去 1 年間で性交渉を持った人数、過去一年間での性交渉頻度、過去一年間での性交渉におけるコンドーム使用の有無を調査項目として含んでいた。

3.1.2　限られた地方を対象とした研究

特定の地域に住む青少年を対象とする性行動についての調査として下記を紹介する。下記の研究は、中学校・高等学校といった学校組織を利用した研究が主であった。

■東京都心性障教育研究会調査 [10][11]　東京都心性障教育研究会は 3 年に一度東京都内の小・中・高生に対して行う性についての調査である。2002 年度調査では調査を希望する学校で、2005 年度では調査協力を得られる学校で調査を行った。中高生に対して、初交年齢を調査している。2002 年度の調査では、高校生に対して初交時に避妊に注意したかを調査している。2005 年度の調査では、初交から調査時までの性交回数を調査した。調査人数は、2002 年調査が中学生 1523 人高校生 3275 人、2005 年調査が中学生 3591 人高校生 3064 人であった。

■福岡県の定時制高校 5 高における性行動・性意識調査 [12]　福岡市内の定時制高校の生徒を対象に、性行動・性モラル・性行動に関するジェンダー意識・性の知識の情報源についてのアンケート調査を 2000 年 10 月から 2001 年 12 月に行った。調査対象は、著者に性教育を依頼した定時制高校 5 校 1 年〜4 年の生徒のうち、調査に同意した人であった。質問紙の配布回収はクラス担任の教師が行った。回答者は男性 252 人、女性 180 人であった。性交渉経験、初交年齢、初交時の避妊の有無、現在の避妊方法と頻度を調べた。

■福岡県での一高等学校における性教育前後での性行動・性意識調査 [13]　福岡県の私立女子高の 1 年生を対象に、性行動、性についての意識、性の知識についてのアンケート調査を、2000 年 7 月に行った。調査対象は、著者に性教育の講義を依頼した女子高の 1 年生であった。調査は性教育講義の前後で行い、性についての意識、性の知識を講義の前後で比較した。性交渉経験の有無、初交年齢、初交時の避妊の有無、避妊の頻度、避妊の方法を調査した。

■北九州市内の高校 3 高における性意識・性行動調査 [14]　北九州市の高校の男女高校生を対象に、性行動、性意識の調査を、性教育とあわせて行った。調査対象は北九州市の高校で調査への協力を許諾した 3 校の生徒、1297 人であった。性交渉経験の有無、初交年齢を調査した。

■高校生の性行動と関連する要因の研究 [15]　青少年の性行動が活発化する要因を明らかにするため、とある県の 1 公立高校の高校生を対象に、学校、家

庭での社会的適応状況、食習慣、喫煙・飲酒経験などの社会的背景と、性意識、コンドーム使用法、性感染症の知識、性行動についてのアンケートを2001年に行った。427人が回答し、有効回答は371人であった。性交やキスなどを含む性行動の経験率を調査した。社会的要因と性行動の活動レベルの間には関連があることが示された。

■大学生の性および生殖に関する意識・行動の実態 [16] 福岡県・大分県の4年制大学大学生（医療系の学生は除く）を対象に、性行動および避妊行動の調査および性行為・避妊についての態度を測定を2001年1月～2001年2月に行った。対象は、男子270人、女子338人であった。性交渉経験の有無、初交年齢、性交渉パートナー数、避妊方法、避妊の頻度を調査した。性行動の活発化に避妊行動が伴っていないことが示された。また、ジェンダー教育の重要性が示唆された。

■性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因 [17] 東京都内のある国立大学の学生を対象に、1989年、1994年、1999年の3回、性に対する態度、性経験、生活環境などの調査を行った。1989年の調査では163人、1994年では216人、1999年では109人から回答を得た。性交を含む性に関連する体験を得点化し、経年変化を追った。男性では有意な変化は観察されなかったが、女子は徐々に性に関して寛容になった。性的寛容さの規定因は大学の成績と父親の性に対する態度であった。性体験の規定因は恋人の有無と本人の性的寛容さであった。

■高校生の性行動、および性教育に対する態度、関心、悩み、についての検討 [18] H県O市およびK市の合計2高校の生徒を対象に、高校生の避妊を含めた性行動、性に関する知識、性に対する態度の調査を2002年10月～2002年12月に行った。対象は、男子157人、女子377人であった。性交渉経験の有無、初交年齢、性交渉パートナーの通算人数、性交渉の合計回数、避妊方法と頻度を調査した。性交渉経験者の多くはコンドームを知っていたが、性感染症予防についての知識は乏しかった。

■膣分泌物自己採取法のよるChlamydia Trachomatisのスクリーニングと性行動との関連性 [19] 東京都内の看護学生を対象にして、自己採取によるPCR法でクラミジア抗原検査を行い、また、性行動と性感染症に関するアンケートを行った。調査対象は579人で、有効回答は308人であった。性交渉経験の有無、性交渉パートナーの通算人数、最近3ヶ月での性交渉経験の有無がアンケートでの調査項目に含まれていた。性交経験とクラミジア抗原検査での陽性の間に関連性が観察された。

■若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究 [20] 厚生労働省「HIV/STD感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究班」は、若年層でのHIV感染拡大を防ぐための予防介入研究の一環として、2001年に若年者の性行動の調査を行った。対象は地方の高校生および東京郊外都市で行われたクラブイベントに参加した若年者であった。対象によって調査項目が異なっていたが、性交経験の有無、初交年齢、これまでの性交相手の通算人数、コンドームの使用状況、などが調査項目として含まれていた。

■男女大学生の性交渉に対する態度 [21] 共学4年制大学の独身男女学生（医療系学部の学生は除く）1146人を対象に、性交渉経験、性交渉に対する態度のアンケート調査を2002年に行った。有効回答数は448人であった。性行動についての調査項目は性交渉経験の有無のみであった。性交渉に対する態度と性交渉経験の有無・性差との間に関連が見られた。

■男女大学生の避妊に対する態度 [22][23] 共学4年制大学の独身男女学生（医療系の学生は除く）1146人を対象に、性交渉経験、避妊法に対する態度、避妊法に対する規範的態度についてアンケートを2002年に行った。有効回答数は461人であった。性行動いついての調査項目は性交渉経験の有無であった。ピル・コンドーム・膣外射精に対する評価と態度が調査項目に含まれていた。避妊に対する規範的態度は性差と関連が見られた。また、2003年には、上記の条件で、性交渉経験、採用している避妊方法、避妊法に対する態度、避妊に対する規範

的態度についてアンケート調査を行った。コンドームの使用頻度、コンドームを使用しない場合の膣外射精頻度、コンドームと膣外射精以外の使用経験のある避妊法について調査を行った。男女の3〜4割程度が必ずコンドームを使用し、使用しない場合には、膣外射精を行うことが示された。避妊法に対する態度、避妊法に対する規範的態度は、性差やコンドームの使用頻度により差があることが示された。

■大学生の望まない妊娠と性感染症の予防についての意思決定 [24]　医学部および薬学部学生を除くK大学の学部学生を対象に、2002年に性交経験の有無、望まない妊娠・性感染症の予防行動の意思決定に関する調査を行った。性交渉経験の有無、交際期間、コンドームの使用状況が調査項目に含まれていた。交際期間とコンドームの使用状況の間に関連性は見られなかった。男女ともに望まない妊娠、性感染症に対する危惧の念は抱いていた。コンドームを利用しない理由としては、性感の重視を男女ともに上げていた。

3.1.3　病院での研究産科・婦人科（女性対象）や泌尿器科（男性対象）の受診者を対象とする研究

■若年女性における性感染症とその予防啓発 [25]　群馬県のいえさか産婦人科医院を1998年〜2000年に受診した10代から20代の女性を対象に、性行動についてのアンケート調査と子宮頚管のクラミジア抗原検査を行った。10代は1477例、20代は1260例であった。過去一年間の性交人数、コンドームの使用頻度を調査項目に含んでいた。年齢が低いほど性交渉人数が多く、コンドームを使わない傾向にあり、クラミジア抗原陽性率が高かった。性交人数が多いほど、初交年齢が早いほど、クラミジア感染率が高い傾向を示した。

■若年者の人口妊娠中絶 [26]　広島市の河野産婦人科クリニックを1990年〜2000年に受診した10代の女性を対象に、アンケート調査を行った。4537人から回答を得た。回答者中1055人が妊娠していた。避妊方法が調査項目に含まれていた。

■栃木県における10代の妊娠の現状 [27]　2001年7月〜12月に、栃木県内の産婦人科を受診し、出産・人工妊娠中絶・流産を行った希望妊娠を含む10代の女性を対象に、初交年齢、パートナーの属性、通算のパートナー数、避妊の有無、避妊方法、性教育経験などについてアンケート調査を行った。回答数は447例であった。避妊をしていることが多い人は全体の27.3％であった。また、避妊方法のうち89.9％はコンドームであり、25.9％は膣外射精であった。回答者の約80％は複数の相手との性交渉を経験していた。

■生活習慣のなかにある性感染症の危険因子に関する分析 [28]　H市内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科を2000年に受診した男女（10代に限らない）に対してアンケートを行い、生活習慣・性行動と性感染症の有無の関係、性感染症に関係する要因を調べた。性交渉経験率、性交渉パートナー数、性交渉の頻度、避妊方法などが調査項目に含まれていた。男性の感染者は非特定の相手との性交渉に、女性の感染者は特定の相手との性交渉に感染源を持つことが示唆された。

■STD感染者の性行動とリスク行動 [29]　H市内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科を2000年に受診し、STDに感染していると診断された男女（10代に限らない）の性行動を調査した。初交年齢、受診までの性交渉人数、受診から過去一年間の性交渉人数、非特定のパートナー人数、コンドームの使用頻度などが調査項目を含んでいた。

調査の結果、コンドームを使用しない傾向が見られた。感染源としては、女性は特定の相手、男性は非特定の相手が示唆された。性行動面では、男女とも特定の相手を持ちつつ、不特定の相手との性交を行った傾向にあった。

■男性性感染症患者の性行動様式についてのアンケート調査 [30]　2001年1月から2001年9月にSTDの症状で泌尿器科を受診した男性（10代に限らない）を対象に、性行動様式についてアンケート調査を行った。症状が現れる前の性交渉経験人数、過去1年間に性交渉を持った人数、感染源と思われる相手との性交渉時のコンドームの使用の有無を調査した。感染源は、金銭の授与を伴わない相手が多かった。過去1年間に性交渉を持った人数は平均

5.8 人であった。また、感染源と思われる相手との性交渉時のコンドーム使用率は 12.4 % であった。北陸地方の若い女性の子宮頸部における性感染症

■北陸地方の若い女性の子宮頸部における性感染症（ヒトパピローマウィルス、クラミジ、淋菌）の危険因子の解析 [31]　北陸地方の産婦人科を 2000 年 7 月～2002 年 9 月に受診した女性を対象に、性感染症の感染の危険因子についての検討を行った。初交年齢、性交渉の通算人数、最近 1 年間の性交渉人数、1 ヶ月の平均性交回数、コンドームの使用頻度、性交渉中のコンドーム使用方法を調査した。性交渉の通算人数と STD 感染危険性の間に関係が見られた。性交渉を持った人数が 6 人以上の女性は何らかの STD に関係していた。

3.1.4　ネットを利用した調査

■10 代女性の性感染症へのリスク認識、コンドーム使用の利益と障害の価値観に関するインターネット調査 [32]　IT を使った予防介入プログラム開発の基礎資料を得る目的で、インターネットを使い、10 代の女性を対象とする性行動、コンドーム使用に関する調査を 2003 年 11 月に行った。回答数は 615 件で、有効回答数は 604 件であった。性交渉経験の有無、性交渉パートナーの通算人数および現在のパートナーの有無、コンドームの使用頻度、最新の性交でのコンドーム使用の有無を調査した。回答者の年齢は、15 才～19 歳であり、最頻値は 15 歳だった。性交渉経験率は 75.5 % であった。毎回コンドームを使用している割合は、25.7 % であった。

3.2　海外での研究について

ここでは英米での調査研究を紹介する。英米以外の先進諸国での調査研究については、西村ら [2] の報告を参照されたい。

3.2.1　アメリカでの研究

■Youth Risk Behavior Surveillance(YRBS)[33][34]　アメリカの Center of Disease Control(CDC) は 2 年に一度、high school の生徒を対象に、Youth Risk Behavior Surveillance(YRBR) を行っている。YRBS についての詳細な情報および調査結果のデータ、YRBS のデータを利用した研究論文は、CDC Youth Risk Behavior[*4] に公表されている。YRBS では、high school の生徒を対象に、通学時のヘルメットの着用の有無、飲酒・喫煙、麻薬の使用、学校での銃の携帯などの危険行動とともに、性行動についての調査も行っている。調査は 2 年に 1 度、州単位で high school で行われる。最新調査は 2005 年に行われた。ただし、調査結果は 2006 年 3 月段階で公表されていない。

2003 年に行われた YRBS 2003 では、性交渉経験の有無、初交年齢、性交渉パートナーの通算人数、過去 3 ヶ月での性交渉の人数、最新の性交渉でのコンドーム使用の有無、最新の性交渉での避妊の有無とその方法、望まない妊娠の有無などが質問項目に含まれている。

2005 年に行われた YRBS2005 の質問内容は公開されていた。望まない妊娠の有無に関する質問は削除されていた。middle school の生徒を対象にした Middle YRBS をあわせて行った。Middle YRBS では、性交渉パートナー数は、通算人数のみをたずねていた。また、避妊方法ではコンドーム使用の有無のみが質問項目に入っていた。

■National Survey of Family Growth[35][36][37]　National Center for Health Statistics は、1971 年から、National Survey of Family Growth(NSFG) を行っている。NSFP は、性行動、同棲、結婚、離婚といった、妊娠、出生率などに影響を与える要素について調査である。最新の NSFP は、Cycle 6 of National　Survey of Family Growth として、準備、データ整理期間を含め 1999 年から 2004 年の 6 年間にかけて行われた。Cycle 5 以前は、調査対象は 15 歳から 44 歳の女性であったが、Cylce 6 では、15 歳から 44 歳の男女になった。これ以前、男性の性行動についての調査は National Survey of Adolescent Males で行っていた。Cycle 6 of NSFP は、調査は CAPI(computer assinted personal interviewing) および ACASI(audio computer-assisted selfinterviewing) を使い調査員が行った。初交年齢、初交の相手についての詳細、

[*4] http://www.cdc.gov/HealthyYouth/yrbs/index.htm

避妊法、中絶を含む妊娠の履歴などの質問事項が含まれていた。なお、Cycle 6 of NSFP の結果では、Cycle 5 of NSFP と比較して 15 歳から 17 歳の女性の性交渉経験率は以前と比較して低下しており、また、初交時期が遅くなる傾向にあった。また、初交時に何らかの避妊法を行っていた女性は 20 歳前に出産することが少なく、避妊を行わなかった女性は 20 歳前に出産することが多い傾向が見られた。

3.2.2 イギリスでの研究 [38][39]

イギリスでは、10 代の妊娠率がヨーロッパ内で最も高い値を示したことと、STD の流行を受けて、1990 年に National Survey of Sexual Attitudes and Lifestyle(Natsal) を行った。望まない妊娠および STD に焦点は移りつつあることを受けて、1999 年から 2001 年に Second National Survey of Sexual Attitude and Lifestyle (Natsal 2000) を連合王国内の諸公的機関のスポンサーの下に行われた。

Natsal 2000 では、調査員による対面インタビュー調査と、CASI (computer-assisted self-interview) で調査を行った。

Natsal1990 との比較して、性別では女性が、地域別ではロンドン以外の地域で、それぞれ、

16 歳以下での初交は徐々に減りつつあり、コンドームの使用は増加していることが示されている。その一方で、男子に対する性教育の重要性も示唆された。

4 考察

4.1 国内での調査

4.1.1 国内調査の特徴

日本国内での青少年の性行動についての調査は、個々の調査は丁寧に行われているといえるだろう。その反面、学校教育の場を使っての調査が主である点や、個々の調査が小規模にである点、調査間で質問内容がそろっていないといった点が問題点として指摘できるだろう。

学校を使った調査は、性教育や予防介入などに付随して行われるため、無作為抽出にならないという点を指摘すべきであろう。また、高校以上は義務教育ではないため、15 歳以上の青少年の性行動の全貌が把握できないという点も考慮に入れる必要があるだろう。

また、教育の場での調査実施は学校側の協力姿勢になんらかの形で依存していた。日本の学校制度下では、高等学校・短大・大学は、地域の生徒・学生の無作為配分により形成された集団ではない。そのため、各地域の青少年を適切に反映したデータであると判断できかねるという欠点を有している。各地域の青少年の性行動の実態を適切に反映するデータ収集には、教育の場での調査のみならず、無作為抽出による調査が必要であると考えられる。

学校での小規模な調査にも、しかし、重要な意義があると考えられる。学校は、児童・生徒が集中しているため集客のためのコストが不要であり、また、既存の施設を利用できるため、新たな投資が不要であるという点で、比較的安価に性に関する情報提供を行える場であると考えらうるだろう。そこでの情報提供を有意義にするためには、情報の受け取り手である児童・生徒に対するマーケティングの実行が望ましく、児童・生徒の性に関する知識、性行動の実態のきめ細かい把握は有効であると考えられる。こうした点で、教育の場における、青少年の性行動調査は、重要な意味を持つといえよう。

医療現場での性行動の調査は、標本数が少ない傾向にはあるものの、性行動の結果として起こる事態と性行動の関係を直接把握できるという点で優れていると考えられる。調査設計の上で参考にできる点が多いといえるだろう。

4.1.2 先行研究を利用した性行動と人口妊娠中絶実施率の関係の解析の可能性

各都道府県の 10 代の人工妊娠中絶実施率と、その地域の 10 代の性行動のデータから、人工妊娠中絶実施率と性行動の関係を示すためには、地域の 10 代を母集団とし、その母集団に関して十分な目標精度のある性行動についてのデータが少なくとも必要となる。例えば、性交経験の有無という 2 値の質的データを扱い、目標精度を 5% とし、該当地域の 10 代の男女の数が 10000 だとすると、大体 400 程度の標本が必要となる。

学校で調査を行い、400 程度の標本を持つ先行研究は存在した。しかし、学校での調査は、特定の学校の生徒を母集団とするため、当該地域の 10 代を母集団としているとは必ずしもいえない。1 つには、調査を行う学校を無作為に選択しているのではないためであり、また、すべての 10 代が高校へ進学するのではないためでもある。また、高校生は多くの場合 15 歳から 18 歳であるため、10 代全体を母集団としているとは言い難い面もある。

従って、学校で行った調査結果と各都道府県の 10 代の人工妊娠中絶実施率の比較は難しいといえるだろう。

無作為に標本を抽出した研究も、関係解析は難しいと考えられる。男女の生活と意識に関する調査 [3] では、10 代の標本は 150 人以下であり、標本が不足していると言えるだろう。STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査 [7] は、18 才以上の男女を調査対象としている。2003 年度以前の 10 代の人工妊娠中絶実施率は、15 歳から 19 歳の女性の統計を 1 つの値として算出している。そのため、10 代の人工妊娠中絶実施率の母集団と容易に比較できないだろう。

全国高校生の生活・意識調査 [8] は、詳細が不明であるため、判断が付きかねる。しかし、各都道府県の 10 代の人口が 2000 人だと仮定し、10 代の性交経験の有無という簡単な 2 値データのみを目標精度 5% で扱うとしても各県で 300 人以上の標本が必要となり、日本全体では 1 万 2 千以上の標本が必要であると考えられる。木原らの調査の標本数は 1 万以下であったため、標本数が十分でない可能性がある。都道府県別の 10 代の人工妊娠中絶実施率との比較は難しいと判断するのが妥当だと思われる。

4.2 国外での調査

英米での調査の特徴は、性行動に関する大規模な体系的調査であった。特にアメリカでは、YRBS が調査項目の詳細さでは劣るものの 2 年に一度という高い頻度で行われる一方で、詳細な調査項目と、標本抽出、予備調査、調査員の教育といった大掛かりな準備を行う NSFG が行われていた。

研究という点では、ともに確率抽出を行っている点に注目すべきであろう。確率抽出により、多面的な解析を可能にし、また、データの誤差の少なさの保障が可能となっている。NSFG や Natsal 同様に、本研究も公的機関の出資により行う研究であり、その成果は、政策立案に反映されるべき性質のものである。本研究も政策立案に科学的根拠を提供できるだけの妥当性を持つべきであると考えられる。

4.3 インターネットを使った調査について

国内の調査では、インターネットを使った調査研究は 1 つしか確認できなかった [32]。この研究では、15 歳から 19 歳の女性の性交渉経験率が 75.7 % であった。調査期間が異なるため、単純には比較できないものの、他の調査と比べて高い値であった。たとえば、1999 年の日本性教育協会の調査では女子大学生の性交渉経験率は 50 % 強であった [5]。木原らによる調査では、大学 1 年生の女子の経験率は 21.7 % であった [9]。

この差が偶然でないとするならば、2 つの原因が考えられる。1 つは、サンプリング・バイアスであり、もう 1 つは、回答方法の違いである。サンプリング・バイアスは、サンプリングを適切に行うことで回避しうる問題であると考えうる。回答方法の違いによる回答内容の違いの有無は今後の検討課題である。本研究では、同じ地域に対し留置法による調査とネットによる調査を並行して行う計画である。標本抽出が適切ならば、本研究により、回答方法の違いが回答内容に与える影響の有無が明らかになると期待できる。

4.4 本研究の意義

本研究では、10 代の望まない妊娠、人工妊娠中絶の要因となる 10 代の性行動を示すことを目的としている。日本国内の 10 代の性行動については多くの先行研究が存在したが、それを成果とした研究は発見しえなかった。この点で、本研究の目的は意義があり、また新規性のあるものといえる。

望まない妊娠、人工妊娠中絶の要因となる性行動を発見するため、本研究では、10 代の性行動についての調査を、都道府県ごとに行い、都道府県ごとの 10 代の人工妊娠中絶実施率と性行動の関係の分

析を行う。この目的を遂行するため、都道府県ごとに十分な標本数を持ちかつ、誤差の少ない調査が必要となる。10 代を対象とする性行動の調査としては、過去の国内での研究と比較して非常に規模の大きな調査となることが予想される。また、要因となる性行動を見出すためには、性行動についての調査項目は詳細なものである必要がある。結果として、目的を達成する過程で行う 10 代の性行動の調査は、それ自体が、データとして有意義なものとなるだろう。

また、研究目的を達成するために、人工妊娠中絶実施率の信憑性の調査も必要となる可能性もある。分析の基礎となるデータが信頼できるものであることは本研究の生命線といえるため、性行動同様に人工妊娠中絶実施状況をも検討の対象することは適切であると考えられる。

以上の点は、本研究の意義として認められうることである。

5 結論

日本国内外で行われた青少年の性行動についての調査研究のレビューを行った。国内の研究は、全人口を対象とする調査、学生・生徒を対象とし学校を使い行ったものから、医療機関の受診者を対象とするものまで、幅広い研究が存在した。国外の研究は、英米の研究を中心に取り上げた。英米では、初交年齢の低年齢化に歯止めがかかった傾向にあり、また、避妊具使用が広まっていることが示されていた。また、先行研究との比較から、本研究の意義と新規性が示された。

6 謝辞

本調査は、東京大学先端科学技術研究センター協力研究員の平林慶史氏および有限会社ノトコードの堀内靖大氏の協力を得て行われました。感謝を表します。

参考文献

[1] 熊本悦明, 塚本泰司, 杉山徹, 赤座 英之野口 昌良, 納谷敦夫, 守殿貞夫, 碓井亞, 香川征, 田中正利, 簑輪眞澄, 谷畑 健生澤畑 一樹. 日本における性感染症サーベイランス - 2002 年度調査報告 -. 日本性感染症学会誌, Vol. 15, No. 1, pp. 17–45, 2004.

[2] 西村由実子, 小松隆一, 木原雅子, 木原正博. HIV 感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学的研究　平成 16 年度　総括・分担研究報告書, 特別研究 (2) : 先進諸国の HIV 行動サーベイランスの結果比較, pp. 289–300. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業, 2005.

[3] 平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）研究　望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究　第 2 回男女の生活と意識に関する調査報告書, 2005.

[4] 北村邦夫, 菅睦夫, 佐藤郁夫. 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究　平成 14 年度研究報告書, 「男女の生活と意識に関する調査」報告, pp. 598–592. 厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）, 2002.

[5] 財団法人日本性教育協会（編）. 青少年の性行動、わが国の中学生・高校生・大学生に関する第 5 回調査報告. 財団法人日本性教育協会, 2000.

[6] 毎日新聞社人口問題調査会（編）. 超少子化時代の家族意識　第 1 回人口・家族・世代世論調査報告書, 東京, 2005.

[7] 木原正博, 木原雅子, 内野英幸, 石塚智一, 尾崎米厚, 島崎継男, 杉森伸吉, 土田昭司, 中畝菜穂子, 簑輪眞澄, 山本太郎. HIV 感染症の疫学研究 平成 11 年度研究報告書, 日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査 (HIV&SEX in JAPAN Survey), pp. 93–112. 平成 11 年度厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策研究事業, 1999.

[8] 木原雅子. 10 代の性行動と日本社会. ミネルヴァ書房, 2006.

[9] 木原雅子, 木原正博, 天野恵子, 中畝菜穂子, 木

村博和, 市川誠一, 大屋日登美, 落合加津子, 山本太郎, 内野英幸, 三浦幸雄, 張谷秀章, 吉崎和彦, 山本和彦, 石井伸子, S. C Kippax. HIV 感染症の疫学研究　平成 11 年研究報告書, 若者の HIV/STD 関連知識・性行動・誠意式に関する研究, pp. 584–593. 平成 11 年度厚生科学研究費補助金　エイズ対策研究事業, 1999.

[10] 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会（編）. 2002 年度調査　児童・生徒の性東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告, 2002.

[11] 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会（編）. 2005 年度調査・児童・生徒の性　-東京都小学校・中学校・高等学校の性意識・性行動に関する調査報告, 2005.

[12] 剱陽子. 福岡県の定時制高校 5 校における性行動・性意識調査. 日本性感染症学会誌, Vol. 14, No. 1, pp. 42–51, 2003.

[13] 剱陽子. 福岡県の一高等学校における性教育前後での性行動・性意識調査. 日本性感染症学会誌, Vol. 12, No. 1, pp. 91–101, 2001.

[14] 剱陽子, 山本美江子, 松田晋哉. 北九州市内の高校 3 校における性意識・性行動調査. 日本衛生学雑誌, Vol. 56, pp. 664–672, 2002.

[15] 井上松代, 西平 朋子園生 陽子, 加藤尚美. 高校生の性行動と関連する要因の研究. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 495–503, 2004.

[16] 平田伸子, 野崎 雅裕斎藤 ひさ子. 大学生の性および生殖に関する意識・行動の実態. 思春期学, Vol. 22, No. 2, pp. 235–247, 2004.

[17] 和田実. 性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 384–391, 2004.

[18] 大東 千晃西海 ひとみ, 水畑 喜代子喜多 淳子. 高校生の性行動、および性教育に対する態度、関心、悩み、についての検討 (第 2 報). 思春期学, Vol. 22, No. 3, pp. 384–391, 2004.

[19] 斎藤益子, 木村好秀, 熊本悦明, 五島瑳智子, 三宅一義, 大石時子, 石淵夏子, 外川ゆりこ. 膣分泌物自己採取法による Chlamydia Trachomatis のスクリーニングと性行動との関連性　東京都内の看護学生を対象として　中間報告. 日本性感染症学会誌, Vol. 12, No. 1, pp. 136–140, 2001.

[20] 木原雅子, 木原正博, 山崎浩司, 伊藤智子, 荒木善光, 今井敏幸, 小松隆一, 日高庸晴, 内野英幸, 市川誠一, 大屋日登美, 片峰茂, 田原靖昭, 久保田健二, 土居浩, 下田和寿人. HIV/STD 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究　平成 13 年度研究報告書, 若者の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究, pp. 240–373. 厚生労働科学技術研究費補助金エイズ対策研究事業, 2002.

[21] 福本環. 男女大学生の性交渉に対する態度：性差、性交渉経験の有無の差からの検討. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 262–267, 2004.

[22] 福本環. 男女大学生の避妊に対する態度. 思春期学, Vol. 22, No. 2, pp. 227–234, 2004.

[23] 福本環. 男女大学生の性交渉に対する態度：性差、コンドームの使用頻度の差からの検討. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 527–536, 2004.

[24] 上田公代, 宮田歩美, 本吉麻衣子. 大学生の望まない妊娠と性感染症の予防についての意思決定. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 537–546, 2004.

[25] 家坂清子. 若年女性における性感染症とその予防啓発. 治療, Vol. 84, No. 7, pp. 1909–1913, 2002.

[26] 河野美代子. 若年者の人口妊娠中絶. 周産期医学, Vol. 32, No. 2, pp. 179–183, 2002.

[27] 森松友佳子, 渡辺尚, 桑田知之, 柴原浩章. 栃木県における 10 代の妊娠の現状. 思春期学, Vol. 22, No. 4, pp. 475–480, 2004.

[28] 山口扶弥, 梯正之. 生活習慣のなかにある性感染症の危険因子に関する分析：外来患者の実態調査から. 日本性感染症学会誌, Vol. 13, No. 1, pp. 60–68, 2002.

[29] 山口扶弥, 梯正之. STD 感染者の性行動とリスク行動：実態の把握と改善策の検討. 日本性感染症学会誌, Vol. 15, No. 1, pp. 48–56, 2004.

[30] 小六 幹夫加藤 修爾, 大西 茂樹中嶋 久雄, 南部 明民半澤 辰夫. 男性性感染症患者の性行動様式についてのアンケート調査. 泌尿紀要, Vol. 48, No. 6, pp. 333–336, 2002.

[31] 安田英代, 笹川寿之, 中野隆, 山崎洋, 井上正樹. 北陸地方の若い女性の子宮頸部における性感染症（ヒトパピローマウイルス、クラミジア、淋菌）の危険因子の解析. 日本性感染症学会誌, Vol. 14, No. 1, pp. 60–68, 2003.

[32] 金子典代, 中瀬克也. 10 代女性の性感染症へのリスク認識、コンドーム使用の利益と障害の価値観に関するインターネット調査. 日本性感染症学会誌, Vol. 16, No. 1, pp. 40–45, 2005.

[33] Jo Anne Grunbaum, Laura Kann, Steve Kinchen, James Ross, Joseph Hawkins, Richard Lowry, William A Harris, Tim McManus, David Chyen, and Janet Collins. Youth risk behavior surveillance - united states, 2003. *Morbidity and Mortality Weekly Report*, Vol. 53, No. SS-2, pp. 1–96, 2004.

[34] Nancy D Brener, Laura Kann, Steven A Kinchen, Jo Anne Grunbaum, Laura Whalen, Danice Eaton, Joseph Hawkins, and James G Ross. Methodology of the youth risk behavior surveillance system. *Morbidity and Mortality Weekly Report*, Vol. 53, No. RR-12, pp. 1–14, 2004.

[35] MD Mosher, A Chandra, and J Jones. Sexual behavior and selected health measures: men and women 15-44 years of age, United States, 2002. *Advance Data*, Vol. 362, pp. 1–55, September 2005.

[36] Joyce C Amba, Gladys M Martinez, William D Mosher, and Brittany S Dawson. Teenagers in the united states: Sexual activity, contraceptive use, and childbearing, 2002 data from the naional survey of family growth. *Vital and Health Statistics*, Vol. 23, No. 24, pp. 1–48, 2004.

[37] Joyce C Abma and Freya L Sonenstein. Sexual Activity and Contraceptie Practices Among Teenagers in the United States, 1988 and 1995. *Vital and Health Statistics*, No. 21, 2001.

[38] Kaye Wellings, Kiran Nanchahal, Wendy Macdowall, Bob Erens, Catherine H Mercer, Anne M Johnson, Andrew J Copas, Christos Korovessis, Kevin A Fenton, and Julia Field. Sexual behaviour in britain: early heterosexual experience. *The Lancet*, Vol. 358, pp. 1843–1850, 2001.

[39] AM Johnson, CM CH Mercer, B Erens, AJ Copas, S McMaus, K Wellings, KA Fenton, C Korovessis, W Macdowall, K Nachahal, S Purdon, and J Field. Sexual behaviour in britain: partnerships, practices, and hiv risk behaviours. *The Lancet,*, Vol. 358, pp. 1835–1843, 2001.

付録:調査結果一覧

タイトル	概要	対象	サンプルの選び方	調査方法	Sample size	性行動についての調査項目
男女の生活と意識に関する調査[3][4]	厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)研究望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究の一環で行った調査16歳以上49歳以下の男女3000人を対象として「男女の生活」についての意識や行動を明らかにする目的	16歳～49歳の男女	層化二段無作為抽出法	調査紙留置法	3000人回収率は約52¥%	性交経験の有無最近一年間の相手人数最近1ヶ月の相手人数初交年齢初交時の避妊方法最近一年間の避妊方法普段の性交渉頻度
青少年の性行動全国調査[5]	日本性教育協会が5～6年に一度行う、全国の中～大学生を対象とする性行動・性に関連する知識の調査。	全国の男女大学・短大・高校・中学生	全国12地域から58校を選択。その学校の生徒・学生が調査対象	学級単位で調査紙を使って集合調査。	中:2187人高:2176人短:112人国公立大:262人私大:755人(合計:5492人)	性交経験の有無初交時期交渉相手の総数現在の交際人数を1人か複数で選択いつもしている避妊方法を回答
家族・世代世論調査[6]	人口問題を主に扱う調査。調査対象が女性に絞られている点に注意。基本的に、少子化をにらんだ内容であるため、青少年の性行動についての調査は乏しい。	全国20歳から49歳までの女性	層別多段無作為抽出法で250地点を選び、選挙人名簿で無作為に一地点あたり16人	調査紙留置法	対象4000人 有効回答率60.5%	既婚者に対して避妊法未婚者に対して避妊の有無
STD関連知識、性行動、性意識についての全国調査[7]	全国18歳から59歳の男女5000人を対象に、HIV/STD関連知識、性行動、性意識についての調査を行った。ピル解禁前の日本人の性行動、性意識を明らかにすることを目的の一つとした。	全国18歳から59歳の男女	層化二段無作為抽出法	対面自記式質問紙調査	対象は5000人回収は3562人。10代は、109人	初交年齢最近1年間の性交渉頻度、コンドームの使用頻度
全国高校生の生活・意識調査[8]	社団法人全国高等学校PTA連合会と2004年度厚生労働省研究班との共同調査。詳細は2006年3月現在不明。	全国高校生	不明	不明	9587人	不明
若者のHIV/STD関連知識・性行動・性意識に関する研究[9]	国公立大学の学生を対象に、HIV/STD関連知識、性行動、性意識などの調査を行った。	30の国公立大学1年生と4年生	入学時健康診断、ないし卒業時健康診断に参加した大学生	無記名自記式調査紙法	13615人(回収率は50%以上)	性交経験率性交渉相手の総数最近1年間の交渉人数・コンドーム使用の有
東京都心性障教育研究会調査[10][11]	東京都心性障教育研究会が、3年に一度行う都内の小・中・高生に対して行う、性行動・性に関連する知識の調査。	都内の男女小・中・高生	調査協力を得られる学校の生徒	不明	2005年小:2689人中:1523人高:3275人 2002年小:2761人中:3591人高:3064人	中高生に対して初交時期初交時の避妊への注意の有無
福岡県の定時制高校5校における性行動・性意識調査[12]	福岡県内の定時制高校の生徒に対して、性行動・性モラル・性行動に関係するジェンダー・性関連知識の情報源について調査を行った。	福岡県内の定時制高校生	著者に性教育の依頼をした5校の調査に同意した生徒。	教室での質問紙配布	男性:252人 女性:180人 性別不明:5人	性交渉経験初交年齢初交時の避妊の有無避妊頻度・方法
福岡県の一高等学校における性教育前後での性行動・性意識調査[13]	福岡県の女子高での調査。性教育の講義の前後での、性行動・性意識・性に関する知識についての調査。性行動についての意識・知識について、講義の前後で比較。	女子高の1年生	著者に性教育講義の依頼を行った福岡県内私立女子高の1年生	教室での質問紙配布	161人	性交渉経験初交年齢初交時の避妊の有無避妊頻度・方法
北九州市内の高校3校における性意識・性行動調査[14]	北九州市内の高校で、性行動・性意識の調査および性教育の講義を行った。性意識については、講義前後での比較も行った。性の意識については、性交渉経験の有無、性差などでも比較	北九州市の高校生	調査への協力が得られた4校の生徒	教室での質問紙配布	全体で1297人	性交経験の有無初交年齢

高校生の性行動と関連する要因の研究[15]	高校生の性行動と関連する要因を知る目的で、1公立高校427人を対象に質問紙調査を行った。性交渉活発さは、食習慣、家庭環境、友人関係などの事項と相関を示した。	ある公立高校の生徒	全生徒	自記式無記名アンケート	437人	性交経験の有無
大学生の性および生殖に関する意識・行動の実態[16]	福岡県・大分県の4年制大学の大学生に対して、性行動および避妊行動の調査および、性行為・避妊についての態度を測定した。性行動の活発化に避妊行動が伴っていないことを示し、また、ジェンダー教育の重要性を示唆している。	福岡県・大分県内の医療系を除く4年制大学の学生	(不明)	自記式無記名質問紙調査	男子:270人女子:338人 合計608人(有効回答率86.8%)	性交経験の有無初交年齢性交相手総数避妊方法・頻度
性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因[17]	1989年,1994年,1999年の3回で、都内のある国立大学の学生を対象に、性に対する態度、性に対経験、生活環境についての調査を行い、経年変化を調査した。女子学生は性に対して寛容になっていた。性的寛容さおよび性行動についての規定因を示した。	都内のある国立大学の学生	心理学の講義の受講者	自記式無記名質問紙調査	1989年:163人1994年:216人1999年:109人	性交経験の有無
高校生の性行動、および性教育に対する態度、関心、悩み、についての検討[18]	高校生の避妊を含めた性行動、知識、態度を質問紙により調査した。性交渉経験者の多くがコンドームを知っているが、性感染症予防についての知識は乏しかった。	ある県の高校生	高等学校2校の生徒	自記式無記名質問紙調査	男子:157人 女子:377人 合計574人(有効回答率90.8%)	性交渉経験率初交年齢性交相手総数合計回数避妊方法・頻度
膣分泌物自己採取法のよるChlamydia Trachomatisのスクリーニングと性行動との関連性[19]	東京都内の看護学生を対象として、自己採取法によるPCR法によるクラミジア抗原検査と同時に、性行動と性感染症に関するアンケートを実施した。7人の陽性例が発見された。クラミジア陽性例では、陰性例と比較して、性交相手の総数が5人を上回る比率が高かった。	東京都内の看護学生	(不明)	調査紙配布	性行動・性感染症についてのアンケート調査:579人(有効回答数511人) クラミジア検査:333人 双方そろった回収数:308人	性交経験の有無初交年齢これまでの性交相手総数3ヶ月以内の新しいパートナーとの性交の有無
若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究[20]	若年層でのHIV感染拡大を防ぐための予防介入研究の一環として、若年者の性行動の調査を行った。対象は地方の高校生および東京郊外都市でのクラブイベントに参加した若年者である。	若年者	2県内の高等学校クラブイベントに参加した若者	無記名自記式調査紙法	A県高校生:4935人B県高校生:6893人クラブイベント参加者:342人	性交経験の有無初交年齢性交相手総数コンドームの使用状況
男女大学生の性交渉に対する態度[21]	共学4年制大学の独身男女学生を対象に、性交経験、性交渉に対する態度のアンケート調査を行った。性交渉に対する態度と性交渉経験の有無および性差との間に関連が見られた。	独身大学生	医療系学部以外の学部に所属する大学生	無記名自記式調査紙法	対象:1146人回答数:411人有効回答率:40.2¥%	性交経験の有無
男女大学生の避妊に対する態度[22][23]	男女の独身大学生を対象として、避妊に対する態度を調査した。2002年の調査¥cite{福本2004b}避妊に対する規範的態度と性差の間に関連が見られた。2003年調査¥cite{福本2004c}避妊法に対する態度、避妊法に対する規範的態度は、性差やコンドームの使用頻度と関係していた。	独身大学生	医療系学部以外の学部に所属する大学生	無記名自記式調査紙法	2002年調査対象:1146人回答数:461人2003年調査対象1744人回答数:584人	性交経験の有無コンドームの使用頻度膣外射精法の使用頻度その他の使用経験のある避妊法

付録:調査結果一覧

大学生の望まない妊娠と性感染症の予防についての意思決定[24]	医学部および薬学部を除くK大学の学部学生を対象に、性交経験の有無、望まない妊娠や性感染症の予防行動の意思決定に関する調査を行った。男女学生とも、妊娠と性感染症を危惧しているものの、コンドーム使用の現状に満足して	大学生	医学部、薬学部以外の学部に所属するK大学の大学生で、調査協力をした教官の授業の受講者	無記名留置調査	対象:407人有効回答:366人	性交経験の有無コンドーム使用頻度
若年女性における性感染症とその予防啓発[25]	いえさか産婦人科医院を受診した女性に対して、クラミジア抗原検査と同時に性行動についての調査を行った。十代の女性は性交渉人数が多く、コンドームを使わない性交を経験することも多く、またクラミジア抗原陽性率も高かった。性交人数が多いほど、性交開始年齢が早いほど、感染率が高い傾向が見られら。質問内容は、多岐に渡るようであるが、論文では、性感染症との関係	群馬県のいえさか産婦人科医院を受診した10～20代の女性	対象者に対して悉皆調査	子宮頚管のクラミジア抗原検査および質問紙による性行動調査	10代:1477例20代:1260例(合計2737例)	性交相手総数初交時期コンドーム使用頻度クラミジア抗原検査
若年者の人工妊娠中絶[26]	河野産婦人科クリニックで受診した10代の女性に対する調査。10代の妊娠した女性の特徴を記述していた。人工妊娠中絶を防ぐための教育の重要性を主張していた。年齢別の妊娠件数の掲載	広島市の河野産婦人科クリニックを何らかの理由で受診した10代の女性	受診者	不明	初診時十代の女性:4537人うち妊娠したもの:1055人(1109件)	避妊方法
栃木県における10代妊娠の現状[27]	出産、人工妊娠中絶、流産などで栃木県内の産婦人科を受診した10代女性を対象に、性行動、性教育の有無について調査を行った。避妊教育、性感染症についての知識の普及が重要であることが示された。	栃木県内の産婦人科を、出産、人口妊娠中絶、流産で受診した、10代の女性	受診者	アンケート調査	回答数:447例	初交年齢パートナーの属性性交相手総数避妊の有無避妊方法
生活習慣のなかにある性感染症の危険因子に関する分析[28]	H市(推測)内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科の受診者に関して、生活習慣・性行動と性感染症の有無の関係を調査し、性感染症に関係する要因を調べた。男性の感染者は非特定の相手との性交渉に、女性の感染者は特定の相手との性交渉に、感染源を持つことが示唆された。	H市内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科を受診した男女	受診者全員	無記名自記式質問表	男性感染者:104人非感染者:54人女性感染者:32人非感染者:95人	性交経験の有無性交相手の数性交頻度避妊方法
STD感染者の性行動とリスク行動[29]	H市内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科を受診し、STDと診断された人の性行動を調査し、リスク行動の特徴を明らかにした。	H市内の泌尿器科、皮膚科、産婦人科を受診し、STDと診断された男女	STDと診断された男女	無記名自記式質問表調査	10代以上の男女10代男性:17人10代女性:7人	初交年齢受診までの性交相手総数最近1年間の性交相手数非特定の性交相手数コンドームの使用
男性性感染症患者の性行動様式についてのアンケート調査[30]	性感染症様症状を主訴にして、受診した男性患に対して、性行動様式のアンケート調査を行った。感染源は、金銭の授与を伴わない相手が多く、また、過去一年間の交渉人数は平均5.8人であった。また、コンドームの装着率は12.4%であっ	性感染症の症状で泌尿器科を受診した男性患者(10代に限定されない)		質問紙調査	241例(うち10代は19例)	性交相手総数最近一年間の性交相手数感染源と思われる相手との性交時のコンドーム使用の有無
北陸地方の若い女性の子宮頚部における性感染症(ヒトパピローマウィルス、クラミジ、淋菌)の危険因子の解析[31]	北陸地方の産婦人科を受診した女性に対して、感染の危険因子についての検討を行った。生涯での性交渉人数とSTD感染の危険性の間に関係があった。性交渉人数が6人以上の人は、何らかのSTDに関係していた。	北陸5病院の産婦人科を受診した女性	調査への参加を了承した受信者	質問紙	全体で718名(年齢別の分布は不明)	初交年齢性交相手総数最近1年間の性交相手数1ヶ月の平均性交数コンドームの使用頻度性交中のコンドーム使用方法

付録:調査結果一覧

10代女性の性感染症へのリスク認識、コンドーム使用の利益と障害の価値観に関するインターネット調査[32]	ITを使ったSTD予防介入プログラム開発の基礎資料を得る目的で行った、ITを使った10代女性を対象とする性行動・コンドーム使用に関する調査を行った。性交経験率は75.5¥%、コンドーム使用率は25.7¥%と他の調査であった。	15歳～19歳の女性	10代の女子中高生を対象とするファッション情報交換や掲示板などで、募集。15歳～19歳の女性による回答を解析の対象にし	インターネットによる調査	回答数615件(うち有効回答数604件)年齢の最頻値は15歳	性交経験の有無性交相手総数現在の性交相手の有無コンドーム使用頻度・最新の性交での使用の有無
Youth Risk Behavior Surveillance[33][34]	High Schoolの生徒を対象とする、危険行動の調査であるYouth Risk Behavior Survaillance (YRBS) をU.SのCDCは2年に一度行う。 結果が公表されているのは2003年調査が最新である。2003年・2005年の調査ではMiddle School YRBSとしてmiddle schoolの生徒を対象とする調査も行った。調査結果は、政策立案や、教育プログラム作成に利用される。	High Schoolの生徒	州ごとに、2段階抽出で学校を抽出学校ごとに調査を実施	無記名自記式調査紙(マークシートによる選択)	2003年調査解析対象数:15,240人	2003年YRBS性交経験の有無初交年齢性交相手総数最近3ヶ月の性交相手数最新の性交での避妊の有無と方法望まない妊娠の有無2005年YRBS2003YRBSから望まない妊娠の有無を削除2005年Middle YRBS性交相手総数コンドーム使用
National Survey of Family Growth (NSFG)[35][36][37]	National Center for Health Statisticsは、1971年からNSFGを行っている。最新のCycle 6では、男女双方のデータの収集を行った。	15歳から44歳の男女	人種、エスニシティ、年齢などに考慮して、PSUを設定。PSU内のブロックから、householdを選択肢、householdから適切な対象を選択	CAPIを用いた調査員による調査。一部の質問については、ACASIを利用。	12571人男性:4928人女性:4928人	性交渉の履歴を詳細に調査
Natsal 2000[38][39]	UKのSecond National Survey of Sexual Attitudes and Lifestyle (Natsal 2000)。1990年のNatsal 1900に続く2回目の性についての調査である。Medical Research CouncilおよびDepartment of Healthをスポンサーとして実施された。調査結果は、政策立案に利用する。	16歳から44歳の男女	居住地域、人種、年齢ごとにサンプル数を決定。	調査員による調査。一部CASIを利用。	11161人男性:4762人女性:6399人	性交渉の履歴を詳細に調査